

【氏名】石岡 丈昇

【所属】(助成決定時)

筑波大学大学院人間総合科学研究科

【研究題目】

絶対的貧困と生活戦略としてのスポーツ

ーフィリピン・メトロマニラのスクウォッターとボクシングジムの事例からー

【研究の目的】

本研究の目的は、フィリピン・メトロマニラのパラニャーケ市にあるボクシングジムの事例から、ボクシングの実践がボクサー個人を超えた所帯単位的生活実践であることを例証することである。

このジムには、ボクサーのみならず、ボクサーの親族や友人までもが居ついている。こうした人々は、清掃夫やガードマン、皿洗い人、ジム隣接レストランのウェイターなど、各種雑業に従事している。ボクシングジムであるにもかかわらず、ボクサー以外の人びとが居つくのは何故か。この社会的論理を明らかにすることから、特定の文化実践(ボクシング)と社会的コンテキスト(スクウォッター世界)に打ち立てられた構造的連関の諸形式を解釈することがねらいとなる。

【研究の内容・方法】

本研究の理論的背景として、P.ブルデューの実践理論を援用する。ブルデューは日本では社会学理論家として注目され、理論的には文化再生産論、概念としてはハビトゥスや文化資本と言ったものがこれまで論じられてきた。しかしながら、ブルデューは元来エスノグラファーであった。特に、初期のアルジェリア研究とフランス農民研究の仕事は、貧困世界のフィールドワークを今日実施する上で、今日、世界的に再評価がおこなわれはじめている。

本研究は、ブルデューのモノグラフ研究において重要な核を成している諸概念、すなわち名誉、センス、時間、イリュージオといったものに注目し、これらを事例分析の中で発生論的使用法のもとに活かしている(具体的には拙稿「貧困下におけるスポーツと生活実践ーマニラ首都圏のボクシングジムとスクウォッター世界から」『スポーツ社会学研究』15巻を参照)。また、ブルデューの「スポーツ社会学のための計画表」(『構造と実践』1988, 藤原書店に所収)に基づき、フィールドワークのための見取図として、ボクシング世界とスクウォッター世界の固有編成原理を各々実定化し、これら2つの世界の境界上に生じる出来事として、先に述べたボクサー親族・友人の生活保障論理が位置づけられることを理論的に定位した。

【結論・考察】

結論は以下のとおりである。

1)ボクサーはマネージャーと協働関係を成すことで初めて公的試合の実施が可能になる。このことは、ボクサーの身体がマネージャーに領有されるものであることを示す。このボクサー＝マネージャー関係は、当事者間で暗黙に自己承認されたものであるが、この関係の表象は積極的に否認される。

2)一方、ボクサーには自らとその所帯の暮らしの存続をマネージャーに訴える発言権が暗に認められている。1)の関係の背後には、生活保障に関わるこの点が根ざしている。マネージャーがこれを拒否した場合、彼の象徴資本は価値を大幅に失う。ボクサーの側から見れば、ボクシング実践が所帯単位の生活実践としてあり、また失業が慢性化したスクウォッター世界において、未来への見構え (fore-seeing) を打ち立てることを可能にする営みとしてそれがあることがわかる。